

カナリヤの詩

CANTUS CANARIARUM

うた

第141号

2007.1.20

1 P	体験	ー 白龍さんのキリストのイニ	体験	2
4 P	体験	ー 白龍さんのキリストのイニ	体験	3
7 P	体験	ー 白龍さんのキリストのイニ	体験	4
9 P	体験	ー 「体験によってもたらされたもの」		
1 2 P	本	「黄泉の犬」	窓口	

2006-10-20 01:05:54 / Weblog キリストのイニシエーション part2

私は、マハポにいた時に、キリストのイニシエーションを受けた。仲間達と皆で上九に向かい受けたのだが、第何上九で受けたのかはもう忘れてしまった。今回のイニシエーションでは、何か体験するのだろうかという期待で、胸が一杯であった。私は、シャクティーパットを4回受けても、何も感じないくらい、靈的に鈍感で、幽霊なんて見たくても見れないタイプなのだ。6年以上、教団にいて、周りの人の神秘体験を、腐るほど見たり、聞いたりしてきたが、自分では全く体験したことが無かった。

修行によって変化したことといえば、浄化法を毎日やったら、体重が半年間で約 15 キロ減ったことと、人の心の状態に対する勘が鋭くなり、人との関係が良好になった程度である。ただし、体重は、急激に減ったので、癌ではないかと陰口をたたかれてしまった。したがって、私には、そういう靈的な体験は、無縁なんだと半ばあきらめていた。しかし、今回のイニシエーションは、必ず何か体験します、させます、使えますみたいな触れ込みだったので、私も、相当に期待をしていた。まあ、確かに、その期待は裏切らなかつた。その、手段を除いては。

イニシエーションが始まる前に、簡単な説明があつて、これから、尊師がバルドーの体験をさせますから、自分の身に起こることをよく観察しておいてくださいと言われた。最初に、着替えてくださいと言われて、手術着みたいなものと、おむつを渡された。え～、おむつ～って感じだったのだが、あまりに強烈なイニシエーションで、失禁する人もいるからということで、渡されたいらしい。私は、マハポの〇島さんの例もあるから、さもありなんと、おとなしく受け取った。これは、今までのイニシエーションとは、違うぞという感覚が、ひしひしと伝わってきた。

順番が来るまで、階段に並んでいたら、なぜか、ウパーリ師とシーハ師がいた。噂では、女性と問題を起こして、降格されて下向したとか言われていたが、イニシエーションを受けるために出てきたようであった。階段の上と下で、お互いに指を差しながら顔を見合わせて、にやっと笑って、お互いバツの悪そうな顔をしていた。

いよいよ私の順番が回ってきた。周りには、正大師や正悟師がいて、尊師から、液体の入ったグラスを渡された。ほんの、一口二口程度の液体の量であった。飲んでみると、

甘いワインのようだが、少々変な味がした。しかし、飲んですぐは、なんの変化もなかった。飲むとすぐに、階段を降りて個室に移った。3畳程度の部屋だったが、釈迦牟尼のタンカかなにかが、一つかかっているだけで、何も無い部屋であった。部屋の外には、タントラヴァジラヤーナの帛依マントラが、うるさくない程度の音量でかかっていた。

しだいに、変化が現れますから、静かに待っていてくださいと言われたので、タンカを眺めながら、何が起ころのだろうと変化を待っていた。2, 3分何も無く過ぎて、何も無いなあと思っていたら、なにか、しだいに、呼吸がしづらくなってきたことに気がついた。あれっと思っていると、いよいよ、苦しくなってくる、吐き気もしてくるし、これはちょっとやばいかなと思って、ドアを開けて、外の担当者に声をかけた。そうしたら師の方が、次第に、バルドーのプロセスに入っていきますから、全てを、グルに預けてください。出来るだけ吐かないでくださいね。と言われたので、気持ちが悪かったが、がまんして吐かないようにして、身体を横たえた。全てを、導師に預けてしまえと思って、心を落ち着かせた。すると、呼吸はいよいよ、かすかになり、あー死ぬんだなあと感じた。なんか、妙に落ち着いていて、まあ死んでもいっか〜と思っていた。

そして、死んだ（おそらく仮死状態になっていたと思う）。その時意識は、一瞬途切れたのかもしれないが、私には、意識が連続していたように感じられた。体がしだいに、ぶよぶよにふくれていく感覚があった。この時が、地元素の崩壊だったのかもしれない。それが、終わると、なにかアメーバーのような丸い細胞のようなものが、細かく振動しながら少しずつ離れ、分解されていくビジョンが現れた。私は、その様子をじっと眺めている感じであった。肉体の構成要素が、分解されていく過程なのかもしれない。

それが終わったと思った瞬間、ものすごい量の、情報の渦が私を襲った。とてつもない量である。何を認識してよいのか分からなくて、ただただ、音や声やビジョンが流れていく、その中を翻弄されるだけだった。

そこから、おそらく、地獄の体験が始まったのか、前生の体験が始まったのか分からないが、怒鳴り声や、踏み切りの音が聞こえ出した。踏み切りのカンカンカンカンという音、点滅する赤い踏み切りのシグナル。女子高生の姿が見える。自殺したのかもしれない。新聞記事なども見えていた。怒鳴り声、けんかをしているのかもしれない、私のわき腹を刺した者がいた。そこから、体液が流れ出るのがはっきり分かった。そして、死んだ。

そんな、苦しい感覚を味わいながら、次々プロセスが進んでいく、死んだと感じたあと、しばらくして、落ち着いたと思ったら、次に、巨大なスクリーンが目の前に現れた。眼前一杯のスクリーンなので、どのくらいの大きさか見当もつかない。そこに、牙をむきだしにしたキューピーが、縦横びつちり並んで、ザッザッザッザッと左から右に、こちらを向いたまま移動していくのである。キューピーちゃんというと、にこっとしたかわいい笑顔を思い浮かべるが、牙をむいて怖い顔をしているのである。それが、昔のインベーダーゲームのように、横にザッザッザッザッと動いていく様は、なんともぶきみであった。

情報に翻弄され、牙のあるキューピーや、諸々のビジョンが見え出して、どれくらいの時間がたったのか、分からないが、相当な時間が経過していたはずである。しかし、あまり気持ちの良い体験はしていなかった。

その後、最も強烈な体験が始まった。私の眼前に、突然美しい青空が広がったのだ。本当に美しい青空だった。そこに、次々と、あるビジョンが現れだした。最初は何か分からなかった。ビジョンだと思っていたのだが、単なる映像というより、物質化現象のようなもので、空間から、突如その物が現れたと言った方が正解なのかもしれない。青い空を背景に、次々と現れた物は、私がかつて執着していた物であったという認識が生まれた。過去世で、命よりも大切に思っていたものだったはずである。それが、ものすごい勢いで現れてきた。どうも私は、ヨーロッパ辺りに生まれていたのかもしれない。ヨーロッパの、旧家にあるような紋章が次々に現れてきた。それを守ろうとして命がけだったのかもしれない。しかし、それが現れた途端、天が割れるような、大きな笑い声が聞こえてきて、これを破壊したのである。次々と現れる紋章を、その声の主は、次々と、こなごなに空中で破壊するのである。その時に、「それは、おまえのものではない！」と天が割れるような大声を発するのだ。

私は、私が愛し、執着した物が、次々に破壊されていく様を、ただ見ているしかなかった。しかし、全てが破壊された最後に、巨大な十字架が現れた。まさに、私の最後の砦であった。偉大なキリストの象徴である十字架であった。私は、「オー、ジーザス、クライスト！」と震える声でキリストの御名を呼んでいた。しかし、私の声が終るか終わらないかのうちに、「これは、お前の物ではない！」と、ものすごい大声が聞こえてきて、目の前で巨大な十字架が大きな爆発音とともに破壊された。

私は、自らの拠り所とするものを、全て失った。すでに、青空は消え、周りは漆黒の闇のみであった。完全なる絶望、完全なる悲嘆、完全なる失意のどん底に落ちた。これは、肉体の苦しみの比ではなかった。何も、希望となる物がないのである。真っ暗闇の中で、立ち上がることも出来ず、顔を床につけて、ただただあえぐだけである。何をしてもよいのかも、何をすればよいのかも分からない。永遠とも思える時間だけが、過ぎていくのみである。まさに無限地獄のようであった。

この後、どれだけの時間が流れたのか分からないが、一つの救いの手が差し伸べられた。長くなってしまったので、そのことについては、明日続きを書くことにしよう。

全ての、希望が破壊され、絶望と失意の底で、あえいでいた私の耳に、暗闇の上のほうから、あの大きな声が聞こえてきた。最初の2,3回は、自己の苦しみに没頭していたので、よく聞こえず、意味も理解できなかったが、その声は、繰り返し「父の名を思い出せ!」と言っていることに気がついた。

「父の名?」ぼんやりした意識の中で、父の名とはなんだろうと、考え出した。現実の意識が少し浮かんできて、父?父の名は、えーと……。しかし、現実世界の父の名では無いとすぐに気づいた。なんだろう、父の名とは?上からの言葉は、相変わらず「父の名を思い出せ!」と繰り返している。分からない……。考えあぐねていた、まさにその時、突然、タントラヴァジラヤーナの帰依マントラが聞こえ出した。「オーム・ア・フーム・ヴァジラナマシヴァヤ・ヴァジラナマブッダヤ・ヴァジラナマ……ニヤ・マヤ」

個室の外で、今まで途切れることなく、かかっていたマントラだが、死の体験が始まってから、今まで一度も聞こえてこなかったのである。それが、突然聞こえ出した。逆に言うと、それ以外の外界の音が全て消え、マントラのみが私の中で鳴り響いた。けっして、大きな音ではなかった。それなのに、私の絶望を癒すように、そして調御しているかのように、静かに深く、その音は私の中に染み込んできた。

その時、私の中で突然、「父の名はシヴァだ!」と気づいた。鮮烈な気づきだった。「そうだ、父の名はシヴァだった!分かった!分かった!」私は、少しずつ身体を起こすことが出来た。「父の名はシヴァなり!」とそっと言ってみた。身体が軽くなった。身体を起こしながら、「父の名はシヴァなり。父の名はシヴァなり。父の名はシヴァなり……。」とマントラのように繰り返していた。しっかり、蓮華座を組んで、その言葉を唱え続けた。

そうしたら、突然闇が裂け、とてつもなく美しい空間が現れた。それは建物の中であった、人間界と同じような建物の造りだが、ものすごくゴージャスに造ってあって、中二階くらいの階段から、一人のそれはそれは美しい女性が降りてくるところだった。私は彼女が降りてくるのを、待っていたのかもしれないが、下から見ているような感じだった。この世界はこの世のものとは、思えない美しい世界であった。

その世界の特徴は、全てが微細な光の粒子で出来ているような感じで、それぞれの粒子が光って美しいのである。トランプなども置いてあったが、それも光の粒子で出来上がっていて大層きれいなのである。おそらく、私の好きな世界であったのだろうが、皮膚に当たる空気が、石綿のようにチクチク痛いのである。おそらく、その世界に住む魂の思念が、現象化しているのかもしれない。その世界は、どうも、一応はシヴァ神を崇めているようなのだが、中には「いよっ!シヴァたいっしん!」みたいな神を揶揄するような声も聞こえてくる。おそらく、批判や揶揄の強い世界なのだろう。それを不快に

思った私は、その世界を去ろうと、さらに意識を上に向け、「父の名はシヴァなり。」のマントラを唱え続けた。

そうすると、今度は、暗い宇宙空間に2本の輪廻の帯が現れた。果てしないほど遠くまで伸びる帯の一つ一つに、自分の前生が映画のフィルムのように、それぞれのコマの中に入っていることが分かった。その数は、無限に近いくらい膨大であった。それが、なぜか2本あった。あるいは行って戻って一本だったのかもしれない。そして、いつの間にか、黒っぽい二つの生命体が、私の左上に現れて、まだ目覚めさせるなどか、どこを見せるかとか話をしていた。

私は、コマの一つ一つを見ていたが、自分の気になる、コマの絵を凝視したら、そのコマの中にスーと入っていった。そこは、どうも、戦闘をしている場面らしく、映像よりも、音声を中心だった。私が、何か重要な役割を任されていたらしく、女性の声で、「まだよ。まだよ。まだだからね!」と言われ続けていた。「まだダメ!まだよ!」と言われていたが、しかし、私は、待ちきれなくなって、何かとてつもない武器を発射してしまった。その時、女性の悲鳴にも似た、「まだ!だめー!!」と言う金切り声があがったと思ったら、宇宙空間で、巨大な爆発が起き、全てが消滅した。そして、テレビのスイッチを切ったように、声も、音も、ビジョンもプツンと消えた。おそらく、私の失敗によって、多くの犠牲を出した、大きな後悔の残った生だったのだろう。

次に現れたのは、雲の上であった。どうも神々の世界の世界である。ここも、戦いの場面であった。どうも、私は、戦いの世界ばかり歩いていたみたいである。その世界では、尊師が、総司令官であった。失礼だが、今生の教祖とは比べ物にならないくらい、威厳に満ち美しい顔立ちであった。その世界では、実は、尊師軍は劣勢であった。古い神々が、次々に負けて戻ってきていたようである。しかし、戦っている相手が誰なのかは、分からなかった。その時に、この戦いに勝利するためには、哀れみの救済がなされないと、勝利できないことを直感した。それを、学ぶためその世界から離れることになったようである。

その後で、面白い生が現れた。その世界は、鈍い金色の光に満ちた世界であった。それほど、高い世界ではないが、天界ではあっただろう。家の中に入っていくところなのだが、身体がものすごく重いのである。一歩歩くたびに、ズシャッ、ズシャッと音がするくらいの重量なのである。しかし、それが、自分自身の重さなのだ。吐く息も尋常ではない。フー!!フー!!と、とんでもない呼吸なのである。身体の大きさは、さほどでないようであった。その時、巨大な身体を小さい身体に変化させたということが分かった。しかし、小さくなくても、凝縮された重量とエネルギーは変わらないようである。おそらく、この生は龍ではなかったかと思われる。私が、HNに白龍を使ったのも、この生の経験からであった。

それはさておき、巨大な身体に満ち溢れていたエネルギーを、小さな身体に詰め込んだのである。そのため、エネルギーが身体から溢れ出し、周りの空気を振動させていた。

まるで、巨大な発電機のようにであった。私の身体の周りの空気がブーンと音を立てて振動しているのである。さらに、部屋の中に入っていくと、一人の美しい女性が、横たわって寝ていた。私の母であった。まるで、古代のエジプトの女性が着ていたような、薄い布地を腰に巻いており、上も同じような薄い布を巻いて胸を隠していた。

母は目を覚まし、私を見て笑いかけた。私は、嬉しくてエネルギーを母に向けた。そうすると、空気の振動がさらに強くなり、母は私によって作り出された、空気のバイブレーションに全身を包まれ、身もだえ始めた。全身がしびれるような感じらしく、足をくねらせながら、気持ち良くて言葉を発することも間々ならないほど悶えていた。この時、この母がケイマ正大師であることが分かった。尊師が、ケイマと縁があると言ったのは、この世界での事だと理解した。この世界では、親子で愛し合うことのタブーがない世界ではなかったかと思われる。あれだけ、巨大なエネルギーを持っていれば、身体を触れ合わずに愛し合うことが可能なのだろう。それを理解した途端、その世界からは離れてしまった。

その後、また私の、心にひっかかっている生が現れたようである。私はどこかの生で、シヴァ神の4番目の息子だった生があるらしい。息子が4人いて、4番目という認識があった。しかし、どういういきさつか分からないが、シヴァ神に、邪悪心を向けたようだ。そうしたら、途端に、地面に叩き落された。その時肩口から落ちたらしく、肩がものすごく痛かった。その肩の痛みを、その後何生も引きずっていたようである。毎生肩が痛いのは、そのためなのかと、なぜかそこで納得している自分がいた。私は、今生では、肩など痛くなかったが、なぜかその時は、肩の痛みがあったことを妙に納得していたのだ。実は、現在50肩で、肩が痛いのであるが、私の50肩の予言だったのだろうか？それではあまりにしょぼい話になってしまう。(笑)

しかし、その後、シヴァ神に対する恨みからか、多くの悪業を積み続け、多くの魂を傷つけたようである。アストラルの世界は、時間や空間を超越しているので、意識を向けるだけで、瞬時に全ての物事が把握出来てしまうようだ。自分が、どれほど多くの悪業を為し、どれほど多くの魂を傷つけて来たのかを瞬間的に知った私は、大変な慙愧の念に駆られた。その申し訳なさから、涙を流して身悶えた。今生あんなに苦しく泣いたことは一度もなかった。まさに、慟哭である。「ウオオオ——！！」という感じで、のた打ち回って泣きじゃくった。

あまりに、大声で、泣き叫ぶものだから、看護婦さんが、ドアを開けて、「〇〇さん、静かにしてください。」と注意された。今まで、アストラルに突っ込んでいた意識が、その時だけ戻ってきて、涙でぐしゃぐしゃになった顔で「すみません。」とか言うのだが、いなくなるとまた、「ウオー——！！」と大声を上げて泣き出して、しばらくは身をよじりながら泣き続けていたようだ。

その後、キリストの体験の最終段階へと入っていった。続きはまた明日書き込むことにする。

一通り懺悔の涙を流した後で、気を取り直して、さらに座法を組み直した。顔は、どういうわけか、あごが上がり固定されてしまう。後で、師の方に聞いたら、おそらくヴィシュッダチャクラで、エネルギーがつまっているため、そうなるのだろうと言われた。しかし、その時は、そんなことは分からないので、あごを上げて、上を向くような感じで、父の名はシヴァなりのマントラを繰り返していた。するとまた、外界の意識が完全に無くなり、大変な風の上昇を感じ出した。懺悔で身が軽くなったせいもあるかもしれないが、強い上昇の風に乗って、意識がどんどん上昇していった。

そして、到達した世界は、形状のない世界であった。紫の美しい光の粒子が噴水のように溢れ、全ての空間が紫の光で満たされていた。そこには、平安があり喜びがあった。そこに留まれば、大変な喜びと、安住があることが分かった。

しかし、その時、ふと下を見た。そうすると、多くの魂が苦しみの中にもだえている様が見えた。あんなに多くの魂が、苦しんでいる、涙が流れて仕方がなかった。なんとかしなくては……。私は、その世界に入ることをやめ、上昇の風に逆らいながら、逆さになって、もがくようにして元の世界に戻ってきた。

次にどうしても、確認しておきたいことがあった。シヴァ大神とは、どんな方なのであろうか、どうしても見てみたくなった。父であるシヴァ大神の顔をどうしても見たかった。父の名はシヴァなりのマントラを唱えつつ、意識を集中させると、足が見え出した。もう少し上である。さらに思念を強め、しだいに身体の上のほうまで上がってきた胸の辺りまで来た。見たい！お顔を見せてください！強く懇願した。最後の思念を振り絞って、顔を上げ、シヴァ大神の顔を見た。見えた！その顔は、なんと導師の顔であった。

いや、正確に言うと、導師のマンガの顔であった。あれっ？て感じもあったが、おそらく私が、実物や写真での記憶修習が足りなくて、マンガの顔の導師ばかり見ていたので、おそらくそうってしまったのではないかと思われる（自分なりの言い訳に過ぎないけど・・・）。それも、あのアニメのかっこ良過ぎる導師ではなくて、ふっくらして、にこっと笑った導師であった。その時の私にとっては、マンガでも何でも良かったのである。シヴァ大神と、導師が同じだったことを知った。心の奥の奥での大納得であった。俺は知った！分かったぞー！と叫びたいそんな気分であった。

そこから場面が変わり、スポットライトのように、光を浴びた導師が、ナポレオンのように馬にまたがり、馬の前足を上げさせた姿勢で静止していた。その馬が、なんとも美しい馬で、何色と表現すれば良いのだろうか？驚色のようなブチがあるのだが、それぞれが、玉虫色に輝いているのである。すでに、顔は、マンガの顔ではなくなっていた。天界で見たような、威厳に満ちた、美しい顔立ちの導師であった。私は、シヴァ大神と、導師が同体であることが分かり、全てが解決し、満足しきってこの世界に意識を戻した。

少し葉が切れ掛かってくると、余裕が出てきて、実験もしてみたくなった。意識を上に向けると、天界のような美しい世界に入るが、下に向けるとどうなるのだろうか？と思い、スーと意識を下げてきたら、身体に虫が這いずり回り出した。ミミズのような虫が、私の身体を這いずりだしたのある。周りもミミズのような虫でいっぱいである。なんとも、気色悪いことになってしまった。これは大変と、また、意識を上に向けると、また、美しい世界に入ることが出来た。今度は、大丈夫かなと思って、また、意識を下げると、やっぱり身体に虫が這い出した。さすがに、それ以上、下に意識を下げる勇氣はなかった。

かなり、意識が戻ってきたら、今度は、私の意志に反して勝手に、手が動き出した。あらあら、という感じで、勝手に手が動き、印を結び出した。あー、この印は見たことがある、この印は気持ちが良いなあとか、勝手に動く手を眺めて面白がっていた。どうも、ナーディーの流れと印は関係があるようであった。それぞれの、ナーディーの中をエネルギーが流れる時、それぞれに違った印を結ぶようであった。

印結びが終わったら、次に、手が空気の流れを感じ取れるようになった。どういうことかと言うと、うちわや下敷きを横にして、空気を切ると、空気がまっすぐ横に切れず、波打つことを経験したことがないだろうか？あんな感じで、手で、空気の波や抵抗が感じられるようになってしまった。気功の人が、気を感じながら、手を動かす時と同じような感じで、空気の動きを完全に把握出来たのである。これは、すごい、何かに役立ちそうであると思って、外にいる人に声をかけ、こんな風に、空気の流れが分かってしまうんですけどと実演しながら、これを何かに役立てられないですかねえと言うと、そうですね、役立つかもしれませんが、覚えておいてくださいねといわれたが、帰る頃には、すっかりその感覚は抜け落ちてしまっていた。今考えても、残念であった。あれが出来れば、気功教室くらい出来たかもしれない。

完全に、意識が戻ってきた頃に、看護婦さんが、「大丈夫ですか？」と具合を聞きにきた。大丈夫ですと答えたら、「脱水症状が起きていたので、3本ほど点滴しましたからね。」と言われた。3本も点滴してたの？ぜんぜん分からなかった。いつの間に？この一例をみても、いかにアストラルに突っ込んでいたかが分かる。

それと、言葉をかけてくれた看護婦さんを見て、あーこの人だったのかと思ったことがある。実は、アストラルに突っ込んだ直後の、恐ろしい体験をしている最中に、瞬間的に現実の世界に意識が戻ったことがあった。それは、たぶん、最も恐ろしい殺されるような体験をしているさなかだったのだろうと思うが、看護婦さんが、ドアをそーっと開けて、私が死にかけていないかどうか、状態を確認しに来たのだろうと思う。

腕を伸ばして、私の腕をそっと触れたのである。間の悪いことに、私は、瞬間的に現実世界に意識が、戻ってしまったのである。アストラルの中で、殺されるような恐怖を味わっている最中に、突然触れられたものだから、暗闇で、突然顔の前に幽霊が現れたような反応をしてしまった。「オワァー！！」と大声を出し、顔を引きつらせて、手を

振り払った。びっくりしたのは、看護婦さんである。静かに寝てると思って触ったのに、突然顔を引きつらせて、大声を出されたものだから、看護婦さんも、「ウァッ！！」と顔を引きつらせて、のけぞって急いでドアを閉めてしまった。そんなことを言うと失礼だが、驚いた時の看護婦さんの顔が怖くてしばらくドキドキしていた。その時、看護婦さんの顔に、大きなホクロがあったのを覚えていた。先ほど、声をかけてくれた看護婦さんの顔に、大きなホクロがあったのを見て、あの時の看護婦さんだったかと済まない気がした。

イニシエーション終了時間が迫ってきたが、かなりまだ突っ込んでいたような気がする。トイレにも、フラフラしながらいった。なんとか、失禁だけはしなかったようである。全て終了して、広い道場で、待機していたが、そこでもまだ後遺症が残っていて、少々ふらついていた。蓮華座を組んで、金剛印を結び、また父の名はシヴァなりのマントラを唱えてみた。そうすると、しばらくして、突如身体が振動し始めた。小刻みに揺れだしたと思ったら、横揺れが始まり、次に縦揺れが始まった。何事が起こったのか分からなかったが、次の瞬間、ボンボンボンと身体が跳ねだした。なんと、ダルドリーが起きたのである。自分でも、びっくりしてしまった。どんなに、クンバカを頑張っても、ダルドリーが起きなかったのに。マントラを唱えただけで、ダルドリーが起きてしまったのだから驚いた。

ダルドリーのおまけもついた、キリストのイニシエーションは全て終了した。当時は6年間、まじめにやってきて、何も霊的な体験がない私をかわいそうに思って、尊師が私にいろいろな、体験をさせてくれたのかなと考えていた。

2006-10-22 01:50:09 / Weblog 体験によってもたらされたもの

これらの強烈体験は、私にとって本当に大切な経験であった。しかし、今だから言えるが、これらの体験は、全て幻影である。おそらく、これが私の瞑想体験として、日常的に起こっていたらどうであっただろう。おそらく、これらの体験を「常」と見たであろう。私のように、神秘世界に興味のある者はなおさらである。そして、そこに慢が生じたであろう。しかし、グル（あえて使わせていただくが）は私に、薬物による、一時的な神秘体験を与えた。もちろん、体験していた時は、体験世界が現実世界なのである。痛み、苦しみ、悲しみ、喜びが、まさに現実のものであった。しかし、私の体験は薬物による一時的なものであったため、幻影であったと知ることが出来た。これは、ある意味ありがたいことであった。

釈迦牟尼は、全ては無常であると言った。全てとは、例外が無いのである。私が、大納得した、グルとシヴァ大神との同一性。これは、私にとって、大変心地よいものであって、心の奥底からの喜びであった。生きていく支えになった。しかし、声を大にして言おう、シヴァ大神も、尊師もグルも幻影である。

しかし、イニシエーション中に、私が、全ての執着を破壊され、絶望し、希望を失った時、救いが訪れた。それがシヴァという幻影であった。これらのイニシエーションの

体験を通して、私は一つの見解を得るに至った。それは、宗教の存在意義は、人間というものの本質が、全ての幻影を取り除くと、生きられないというところに立脚しているのではないのかということである。

人間は、深い深い意識の奥底でそれが幻影であると分かっている、それを常とみて幻影を求めるのである。そうしないと、人間は生きられない生き物なのだ。故に、この境地を超えたものから見れば、哀れなのである。どのように、無常と幻影を説いても、本質的に幻影が無いと生きて生けない生物、これが人間なのだ。なんと、もろく、か弱い、哀れな存在であろうか。故にいとおいしいのである。私の体験した、あの、何の希望も、喜びも、生きがいも無い境地で生きていけるものなどいない。故に、人は希望と言う幻影を求め、宗教を求める。どうせ、幻影がなくては生きていけない生き物なら、少しでもましな幻影を与えようと言うのが宗教である。

その中で、特異な存在が、釈迦の教えであると思われる。到達するのが、ほとんど不可能であることが分かっているが、真正面からこの世が幻影であることを説いた。それは、まさに真理であったのだろうが、人間の本質を考えると、相当に難しいことを知っていた。故に、この世で法を説かず涅槃しようとしたのではなかろうか。仏教の教えは、すばらしい教えである。西洋でも、釈迦の哲学的、科学的、論理的才能は、大いに認めているところではあるが、2600年たっても、世界唯一の宗教にはならなかった。それは、なぜだろうか？

仏教の本質的教えは、無我である。よくいろいろなところで、真我と無我の論争が展開されるが、仏教の教えの本質は無我なのだ。しかし、人間は幻影を持たなくては生きていけない生き物なのである。一生懸命修行をし、到達した先が、何も無いというのは、基本的に思いたくないのだ。賢者は、そこに本質的な意義を見出すが、一般の人間は、何も無い境地は嫌なのである。よって、しだいにアトマンのように、光り輝く真我的存在を持ち出すようになったのかもしれない。最初は真我は存在するかもしれないから、いや存在するはず、存在するのが当たり前と変わっていったのではないだろうか？

もちろん、仏教も、いろいろな美しい世界観を作り出したが、本質が無我なのだから、いくら美しい世界観を示しても、それらは幻影で、いつかあなたの元から、無くなりますよと言われて、うれしい人間はいないのである。なぜなら人間は、幻影がなくては生きていけないから。よって、釈迦牟尼が入滅するとしだいに、衰退していったのではないだろうか？

しかし、釈迦がその境地に到達したように、到達するものが、皆無ではないのである。故に、同時に慈悲を説いた。その境地は得がたい境地である。そこに至れば、完全なる苦の消滅があるのであろう。しかし、当然挫折者も続出するし、もともと入ってこれない者もいる。これらの者に法則を説き明かすには、大いなる慈悲がなければ、法則を説き明かすことができないのである。もともとが、無理を承知、反感を買うのを承知で説くのであるから、強い慈悲の心がなくては途中で挫折してしまうのではなかろうか。お

そらく、釈迦も、将来自分のように、大いなる慈悲によって、得がたい境地を説き明かす弟子を育てようとしたのであろう。

そのための、方法論や技法をいろいろと残してくれたのである。しかし、それらの手段方法をいくら知っていても、本質的に、全てが無常であり、幻影であるという視点を忘れた時、迷い道にはまりこむ。大事なのは、「す・べ・て」が無常だということだと思ふ。そういえば、アーチャリー正大師の歌に無常という歌があった。『すべては～、すべては～、無常なんだよ～。』っていう歌であった。あの歌に、「シヴァ大神もグルも尊師も無常なんだよ～。」と入れるべきだったと思ふ。そうすれば、今日のこの教団の分裂はなかったはずである。

私の書き込みを見た方で、尊師とかグルとか、バンバン書きまくるのを、いぶかしく感じてみていた方もいただろうと思ふが、尊師もグルも幻影である。ただ、私に、このような見解をもたらせてくれた人物に対する、恩返しとして使わせていただいたということでご容赦願いたい。

4日間に渡って、キリストのイニシエーションについて書きまくった。昨日で、1ヶ月間、休まず書き続けてしまった。ほとんどワーク状態である。自分でもよくやったと思ふ。なんで、こんなに頑張っているのか自分でも分からない。(笑)最後の結論は、実は書きながら、今出てきた見解なのである。まるで、誰かが私を使って書かせているような感じがしている。読んだ方が、どのような感想をお持ちになるだろうか？仏教観などは、歴史的な背景も、知識も無く雑感のごとく書いてしまったので、首をかしげる方もいらっしゃると思ふが、間違っているようなところがあれば、指摘いただきたいと思ふ。和井さんよろしく。(笑)なんらかの形で、少しでも、皆様のお役に立つような話であつたら幸いである。

すべての皆様の上に、神々の祝福がありますように。

＜目次＞

1 P	体験	ー 白龍さんのキリストのイニ	体験	2
4 P	体験	ー 白龍さんのキリストのイニ	体験	3
7 P	体験	ー 白龍さんのキリストのイニ	体験	4
9 P	体験	ー 「体験によってもたらされたもの」		
1 2 P	本	「黄泉の犬」	窓口	

本「黄泉の犬」

>藤原新也著、文藝春秋社、1857 円と税
2006.10.30 発行

うん、84ページ以降は基本的にいいんですよ。インドでの実にさまざまなこと、実に興味深く感動的。で、だからこそ、自分の土俵の上でいいから確実な情報の上に基いてオウムを論じて欲しい。麻原さんが水俣病であった可能性のことが書かれているのです。

麻原さんについては、親は在日朝鮮人であるとか被差別部落出身であるなどとの話が流れた。これについては「麻原彰晃の誕生」という本に詳しく書いてあった。勿論、その事実を否定する形で。麻原さんは父親が1910年から日本の植民地だった朝鮮半島で、生まれただけ。戦後引き上げている。父母も勿論麻原さんも被差別部落出身などではない。いい加減にして欲しいと思う。(麻原さんは、被差別部落出身の信徒に対して、俺もそうなんだと言って出家するよう勧誘していた。ひどいものだ。)

で、今度は水俣病ですか、麻原さんの一番上のお兄さんから、接待したうえで「水俣病だ、シャコを多く食べた、申請したが認められなかった、アカと言われるから裁判はしなかった」と聞き出したとのこと。ふー。

なんで他の兄弟には当たらないのかな。兄弟は多くいて、1995年当時、麻原さんが事件で著名になったのをきっかけにか、既にデビューしていたところ歌手として改めて出てきたお姉さんまでいた。

で、一番上のお兄さんは「教祖になってくれ」と麻原さんから言われた、などとも言っている。他の麻原さんといつも行動していた旧い信者さんも誰も言うおらず、カルトの特性からしてもあり得ないのに、そう言われたと本人のみが言

っているお兄さん。その話を元に、よくもまあここまで書けるなあ、と。

あの一、八代市が水俣のすぐ隣なんて、藤原さんは気づかなかったようだが、有明海周辺なんだから直ちに関連性が頭にててくるのですよ。地理を勉強してないなあ。で、八代市住民にも中には認定されている患者さんもうよう転居するのですから。中には、水俣湾の魚を多く食べている人がいても不思議ではない。それを驚いたように、調べをくり返して分かったようにしよもない書き方をしている。

で、麻原さんは、生まれつき片目が見えないのです。もう一方も進行性で見えなくなってきていたのです。ですから、出産後、水俣病になりその症状として目が見えなくなったということはまずない。シャコをやたら食べていたとしてもです。残るのは、胎児性水俣病かどうかですが、やはり麻原さんにはその他の水俣病に特徴的な症状は一切ない。シビレ云々なども、あったと言っているのはこのお兄さんだけ。そもそも麻原さんの目は、神経性の視覚障害ではなかった筈ですがね。

ということで、そりゃ100%の否定はできないが、「水俣病の可能性」とはやはり言うほどのことはないと判断された。だから、調べた方々も、結局、なんら書かなかった、だけのこと。それがまともなジャーナリスト。著者自身は、重要なことを書いたのに反応がないのはおかしいというように言うておられるようですが、そんな事実関係だから、反応がないのは当たり前でしょう。

軽率極まりない。この方もオウムや麻原さんのことを「プレーボーイ」に書いていた。そこは、教祖の空中浮揚写真、この人の文章、今は森達也さんの文章、実にしよもな。

「魂の遍歴」みたいな所は、実に良いんですが、この本。実に残念。